学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　自然会話における二連鎖感動詞類に関する研究

申 請 者 氏 名　　劉　伝霞

日本語においても，中国語においても，自然会話では，感動詞類が頻繁に出現する。日本語の感動詞類には，「え」，「ま（あ）」などの感動詞，「うん」，「はい」などの応答詞（cf. 田窪行則 1995:1023-1024）が含まれる。中国語の感動詞類には，「啊{a}」，「哦{o}」などの感動詞（cf.劉月華 1992:188），「嗯{en}」，「对{dui}」などの応答詞（cf.黄麗華 2002:47）が含まれる。日中両言語における，「え」，「啊」（あ）などのような単独で現れる感動詞類（「単独感動詞類」と呼ぶ）は，会話では非常に頻繁に使われている。これに対し，2 つの異なる形式の感動詞類が連続している場合（「二連鎖感動詞類」と呼ぶ）がある。例えば，日本語では，「あ，うーん」，「うん，そーそー」などの発話が見られる。中国語では，「啊，嗯ー」（あ，うーん），「嗯，对对对」（うん，そーそーそー）などの発話が観察される。

なぜこのように複数の単独感動詞類が連続して現れるのだろうか。二連鎖感動詞類は単に単独感動詞類が 2 つ並んだものなのだろうか。例えば，「あ，うーん」は，「あ」と「うーん」の時系列の意味の総和なのだろうか。そうではなく，別の仕組みが存在するのではないだろうか。

本論文の目的は，感動詞類の複数連鎖という言語現象に潜んでいる普遍的なルールや法則性を導き出すことである。具体的には，日本語と中国語の自然会話に現れる二連鎖感動詞類を対象とし，前項（前に位置するもの）と，後項（後に位置するもの）にはどのような感動詞類が分布するのかを記述するとともに，そこにどのような認知プロセスが流れているのかという問題を解明する。さらに，日中両言語における二連鎖感動詞類の共通点と相違点を探ることによって，言語普遍的な仕組みを見出していく。

まず，日本語と中国語の自然会話における 1 ターンの二連鎖感動詞類を対象とし，前項と後項にはどのような感動詞類が分布するかといった問題を統語的に分析するとともに，そこにどのような認知プロセスが流れているのかという問題を考察した。その結果，以下の「真偽判断に関する認知プロセス」の仮説を立てた。

(1)①二連鎖感動詞類を構成する感動詞類は，4 種類の任意出現の認知プロセス，即ち，アクセス（A 群），真偽の検討（B 群），真偽判断の保留（C 群），真偽判断の確定（D 群）に分類される。

②4 種類の認知プロセスにおいては，「アクセス（A 群）→真偽の検討（B 群）→真偽判断の保留（C 群）→真偽判断の確定（D 群）」という統語的順序がある。

次に，日本語と中国語の自然会話における 1 ターン内の二連鎖感動詞類を対象とし，どのような種類の感動詞類が連続しているのかという統語的な問題を解明した。そのうえで，二連鎖感動詞類と先行発話・後続発話に生じる認知プロセスの枠組みを明らかにした。最終的には，「真偽判断に関する認知プロセス」の仮説を検証し，修正した。その結果，以下のことを仮定した。

(2)①1 ターン内の二連鎖感動詞類を構成する感動詞類は, 4 種類の任意出現の認知プロセス, 即ち，アクセス（A 群），真偽の検討（B 群），真偽判断の保留（C 群），真偽判断の確定（D 群）に分類される。

②1 ターン内における二連鎖感動詞類の先行発話・後続発話には，真偽判断に関する認知プロセスをモニターしている発話（D'群）と，新情報を表す発話(X)の 2 種類がある。

③前者においては「A 群→B 群→C 群→D 群・D'群」という統語的順序がある。

④後者においては，「X→A 群→B 群→C 群→D 群→X」という統語的順序がある。

結果として，「1ターンの二連鎖感動詞類」，「1ターン内の二連鎖感動詞類」いずれの場合でも，二連鎖感動詞類は単純に2つの感動詞類が並んでいるわけではなく，少なくとも「A 群→B 群→C 群→D 群・D'群」という統語的順序がある。即ち，「アクセス（A 群）→真偽の検討（B 群）→真偽判断の保留（C 群）→真偽判断の確定（D 群・D'群）」という一連の認知プロセスがあると仮定できる。この統語的順序は日本語・中国語に共通するものであるため，このような一連の認知プロセスを「認知ユニット」と捉え，以下のように提案した。

(3)認知ユニット：

自然会話において二連鎖感動詞類が現れる場合，そこで発話者が行う複数の認知プロセスの順序付けられた集合体を「認知ユニット」と呼ぶ。

ただし，本論文で仮定したのは真偽判断に関する認知プロセスだけである。そのため，これ以外の認知プロセスが存在するかどうか，またそれが存在したとして，認知ユニットのようなものを構成するかどうかについては現時点では不明である。従って，本論文では，(4)のように限定して認知ユニットを仮定した。

(4)真偽判断に関する認知ユニット：

【アクセス（A 群）→真偽の検討（B 群）→真偽判断の保留（C 群）→真偽判断の確定（D 群・D'群）】

さらに，この認知ユニットについては，感動詞類の反復現象や「リセット感動詞類」の存在によって検証することができることを示した。

以上より，本論文では，談話的・認知的アプローチによって，二連鎖感動詞類が出現する1ターンの発話には，二連鎖感動詞類がモニターしている真偽判断に関する認知プロセスが流れているという理論を構築した。そして，その認知プロセスの流れは，二連鎖感動詞類の前後にある特定の先行発話・後続発話にも存在していることを仮定した。このことから考えると，会話全体に何らかの認知プロセスが流れていることが想定できるかもしれない。今後の課題としたい。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 143 号	氏　名	劉　伝霞
論文題目	自然会話における二連鎖感動詞類に関する研究		

（論文審査概要）

まず，本論文の概要を以下に述べる。

本論文の目的は，感動詞類の複数連鎖という言語現象に潜んでいる言語普遍的なルールや法則性を導き出すことである。そのため，日本語と中国語の自然会話に生起する二連鎖感動詞類を対象としている。例えば，日本語では自然会話において，「あ，うーん」「うん，そうそう」のように，２つの感動詞類が連続して生起する場合がある。これは中国語でも同様で，「啊{a}，嗯{en}—」（あ，うーん），「嗯{en}，对对对{duiduidui}」（うん，そーそーそー）のように二連鎖感動詞類が生起する。言うまでもなく感動詞類は単独で生起することもあるが，なぜこのように２つ連続して生起することがあるのだろうか。そこにはどのような仕組みが存在しているのだろうか。また，何らかの仕組みがあるとしたら，言語ごとに異なるのか，それとも言語普遍的な性質なのだろうか。このような疑問から本論文の分析は出発している。分析の方法論としては，感動詞類の分布を記述するとともに，認知プロセスの観点からアプローチしている。

本論文の構成は次の通りである。まず第１章では，研究動機や研究目的など述べている。第２章では，談話研究における先行研究を挙げている。第３章では，本論文の立場，用語の定義，言語データの文字化の方法について説明している。第４章・第５章が分析である。第４章では，二連鎖感動詞類だけで１ターンが構成されているデータを対象としている。第５章では，二連鎖感動詞類とその前後に生起する発話から１ターンが構成されているデータを対象としている。いずれにおいても，日本語と中国語の発話データを緻密に分析している。第６章はまとめで，第４章・第５章で解明された認知プロセスに関する仮説を提示している。第７章は問題点・今後の課題であり，第８章は終章である。

最終的な結論としては，①二連鎖感動詞類には４種類の認知プロセスが順序付けられて流れている，即ち「アクセス→真偽の検討→真偽判断の保留→真偽判断の確定」という順となっている，②この認知プロセスの流れは日本語・中国語に共通するものである，③従って，このような複数の認知プロセスの順序付けられた集合体を「認知ユニット」として仮定する，④認知プロセスの流れを途中で阻止し，最初のステップに戻す「リセット感動詞類」の存在を仮定することができる，という４つの仮説が提出されている。

次に，本論文に関する審査結果を以下に述べる。

１．創造性

従来の説を十分に理解したうえで，新しい論点，仮説，証明方法が付加されており，その新規性について自覚的に表現できていて，当該研究テーマあるいは関連研究分野への貢献が明確である。特に，認知ユニットやリセット感動詞類といった新たな概念を提起したことは極めて優れている。

２．論理性

適正な論証手続きに基づいて仮説を検証するなど，一貫性のある展開から結論が導かれている。しかし，やや説明が不十分な点も残っている。全体の評価としては達成できている。

３．厳格性

先行研究は十分に渉猟咀嚼されており，質・量ともに十分な証明資料，そして厳格な方法が用いられている。評価は全体として優れている。

4．発展性

今回提示した認知プロセスは言語全体に流れている可能性があることから，感動詞類以外を対象とした研究も考えられる。また，日本語教育や人工知能研究への貢献も期待できる。従って，将来大きく発展する可能性のある論点や研究枠組み・視角・方法が萌芽的に提示されている。全体として極めて優れていると評価できる。

なお，外部審査委員からも上記と同じ評価がなされている。すなわち，非常に独創性があり，今後の感動詞類の研究に多大なる貢献をすることが期待されるという高い評価であった。

以上より，審査委員会における審査委員の合議によって，全体の評価が「達成できている」以上であることから，論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）有元光彦

（氏 名）葛崎偉

（氏 名）和田学

（氏 名）山本冴里

（氏 名）